
変態でハーレムな魔法使い！

わうわう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態でハーレムな魔法使い！

【Nコード】

N0537Z

【作者名】

わうわう

【あらすじ】

「こんにちは、胸を揉ませてくれませんか？」

2012年、今の現代に魔法が絡み合った世界。

主人公、神崎 海斗はぴっぴちの高校1年生。

数々の伝説を残す破天荒な少年である。

今日も女の子に【自主規制】なことをする、あるいはしてもらっため、

元気に登校中っ！

時に変態で、時にシリアスで、時に日常的な物語、ついに始まるっ

！！（ポロリも魔法もあるよっ！！）

プロローグ（前書き）

【注意事項】

- ・とりあえず、主人公は最強設定ですつ。
- ・小説のくせして一話が超短いです。
- ・細かいところはなんとなく適当に書いているところもあります（泣）
- ・なんかもう色々詰め込みすぎてカオスな状況になってたりするかもしれません。
- ・登場キャラ数が多いです。
- ・一回の投稿文字数はめっちゃ少ないです（汗）
- ・更新速度はめっちゃ遅いです。
- ・主人公は変態です。

それでも読んでやるよ、という方のみ本文へお進みください

プロローグ

【プロローグ】

高校生。

この甘酸っぱい青春の詰まった言葉に皆は何を思っただろうか？

昔、高校生をしていた人も

今、高校生真っ盛りの人も

これから高校生になる人も

十人十色。

色んな人がいて、色んな思いがある。

高校生。

楽しい思い出を作ったり。

苦い黒歴史を作ったり。

全部が全部、いいことばかりなんかじゃない。

でも、そういうのも全部ひっくるめて高校生の思い出。

綺麗だったり。

汚れてたり。

不思議だったり。

それらは全て、その人の思い出となり心の中に宝石となって輝き続ける。

甘かったり。

辛かったり。
苦かったり。

色んな出来事があって、飽きることもない毎日。
自分次第でどんな色にも変わる高校生活。

高校は色んな感情、思い出の集まる場所。

あなたは、どんな高校生活を送りたいですか？
あなたは、どんな高校生活を送りたかったですか？

俺は・・・

プロローグ（後書き）

はい、変態な作者です。

今回は注意書きとへんなプロローグしか投稿できないという非常に残念な結果となりましたっ・・・

これから変態主人公頑張って考えますからっ！！

それと、どうでもいい情報。

作者はシスコンです！！

・・・ごめんなさい、なんでもないです（泣）

入学式（前書き）

【注意事項】

- ・とりあえず、主人公は最強設定ですつ。
- ・小説のくせして一話が超短いです。
- ・細かいところはなんとなく適当に書いているところもあります（泣）
- ・なんかもう色々詰め込みすぎてカオスな状況になってたりするかもしれません。
- ・登場キャラ数が多いです。
- ・一回の投稿文字数はめっちゃ少ないです（汗）
- ・更新速度はめっちゃ遅いです。
- ・主人公は変態です。

それでも読んでやるよ、という方のみ本文へお進みください

入学式

校門の前にて。

「お兄ちゃんの変態っ」

「ぐはっ!？」

『妹』からの華麗なひじ鉄に悶絶する『兄』が一人・・・。

妹。

「女の子の胸ばかり見てっ!」

名前は【神崎 美咲】
かんざき みさき

この物語の主人公である、神崎 海斗の妹である。

身長は155cmと、女子の中では平均的。

髪の毛は肩にしかかる程度で、横に片方に結わえてリボンをつけているのが特徴的。

兄。

「いや、たまたま目がいつちゃっただけだって・・・

名前は【神崎 海斗】
かんざき かいと

この物語の主人公である。

身長は173cmとこれまた平均的。

髪の毛に、癖はなく肩にかかるか、かからないか程度のオーソドックスな髪型。

「本当に・・・?」

疑いの目で兄を見上げる妹。

「本当だって」

その妹から逃げるように目を逸らす兄。

「ホントウ？」

今度はニツコリとした（ただし、目は全く笑っていない）笑顔で。

「すみません、見まくってました。」

なんとも情けない兄つぷりを披露する。

「もう、お兄ちゃんつたら・・・そういうことなら私を見れば・・・
・ブツブツ。」

なにやら急になにか妹が独り言をつぶやき始める。

「なあ、とりあえず校舎に入ろうぜ、入学式に遅刻するなんて嫌だ
ろ、な？」

今まで女の子の胸ばかり見ていた自分のことは棚に上げ、妹の妄想
世界を打ち砕くため、

もってもらしい正論を吐く兄。

「ふあっ！？ そそそ、そうだねお兄ちゃんっ！ 早くいこっ！！」
やっと現実に戻ってきた妹は顔を真っ赤にしながらパタパタと校舎
に向かって走っていった。

その後ろ姿を眺めながら兄は・・・

「まったく・・・なんて可愛い妹なんだっ！」

・・・と、変態シスコン発言を堂々と呟いていた。

『後ろから覗かせていた殺気には気が付いていないフリをしながら
』

「なっ！？ ひ、広いな・・・無駄に・・・

校内に入ってみると、なんのために作ったのか、あまりにも大きな下駄箱が『海斗』を待ち受けていた。

「お兄ちゃんっ！ 時間ないよっ、遅刻しちゃうっ！」

『美咲』はこの馬鹿げた大きさの下駄箱に気づかない様子で海斗に急ぐように促す。

「そんな慌ててる美咲も可愛いよ。よし、行くかつー！」

前半部分に変態丸出しな言葉を発してたのは秘密

「ふあっ！？ も、もう・・・お兄ちゃんのバカっ、・・・ふふ、いこ？」

そんな海斗の緩み具合に美咲は呆れたのか、落ち着きを取り戻した様子で海斗に微笑みかけていた。

体育館へ
。

「はあ、はあ・・・やっと着いたあ。」

俺たち兄弟はなんとかギリギリ入学式の行われる体育館にたどり着いた。

「だからなんでこんなに広いんだよ・・・」

そこは、まるで校庭をそのまま体育館にってしまったような広さだった。

一体、何をするつもりなんだろうか・・・？

「お兄ちゃんっ、あっちの席、空いてるよ！」

美咲が空いている席を指差しながら目一杯の笑顔を海斗に向ける。

「お、おう、今行くっ！」

海斗はそう言い、美咲の座った席の左隣に座る。

美咲は未だに興奮した様子で目を輝かせながらキョロキョロあたりを見回していた。

（しかし、こんなに元気な美咲を見るのも久しぶりだな・・・）
それに、さっきまで走っていたため、頬がほんのりと朱に染まっている。

そして、そこに目一杯の笑顔。

笑顔がまぶしいとはまさに今の妹のことなのだろうと、このときの俺は思った。

やっぱり、高校生はいいものだ・・・

俺はしみじみと感じた。

妹の中学生から高校生への成長。

体はさすがに突然変わったりなんてしない。

しかし、中学から高校に上がったことで、気持ち的にワンランク大人になったようだ。

身体的ではなく。

精神的に。

普段の可愛い外見からチラリと色香を漂わせる魅惑的な体になっていた。

一言で言えば。

『最高だ』

俺が人生で見してきた妹史上で最も可愛いと断言できる。

たしかに、俺の人生はちっぽけでまだ、俺の知らない妹たちもいるのだろうが、

それでも、『俺の妹』は最高だといえるだろう。

『つまり、俺の妹が、最高で最強だとっ！！』
大事なことなので、これから何度も言います。

「ふう……。」

妹の隣で海斗はそんなことを考えていた。
なかなか重度なシスコンぶりである。

「あつ、お兄ちゃん、式が始まるみたいだよっ？」

「ん、ああ、そうだな」

視線を前に戻す。

壇上には学校長がマイクに手を取り、新入生に歓迎の式を執り行う準備をしていた。

ここから始まる。

この世界。

いや、全世界を動かす少年の物語が……。

入学式（後書き）

あとがきはいつもここから。

シスコンな作者です。

主人公の登場ですっ！！

今回は、変態ではなく。

シスコン重視なお話となっていました。

しょうがないね。

妹可愛いもんね。

いつかタイトルが【シスコンで変態な魔法使い】とかになりそうです（笑）

・・・とまあ、そんな冗談はこれぐらいに。

魔法要素はまだまだ出てきません。

ハーレム？ 当分来ないよ？

すみませんっ。 すぐ出しますっ！！

それじゃあねっ！！

隣の席の女の子

「俺、美咲と離れるぐらいなら・・・！」

「私も、お兄ちゃんと会えなくなっちゃうくらいなら・・・！」

『いま、ここで・・・！』

しかし、妄想を現実にする勇氣は、この二人にもなかった。

俺は美咲の頬にそつと触れる。

彼女は、少しくすぐったそうにしながらも海斗の手を受け入れる。
その顔はほんのりと朱に染まっていた。

手を、肩のほうに動かす。

美咲はびくつと反応して、体を揺する。

俺は構わずそのまま肩を両方の腕で抱きしめる。

しばらくそのままの状態を維持していると、美咲も慣れたのか、
海斗の腕を自分の手できゅつと掴む。

その反応に俺は満足し、そのまま美咲の体を半回転させる。

「目、つぶってる」

「う、うん・・・」

ぎゅつと美咲が目をつぶる、その姿が妙に愛おしく、その状態を維持したいと、

俺の本能が告げているが、そこは我慢。

俺は後ろから美咲の体をゆっくりと押していく。
そして壁にぶつかる少し手前でとめる。

その壁には『二人にとっては』重要なことが書かれていた。
しかし、美咲は目をつぶり、俺は壁から目を逸らしていたので、内容
は二人とも知らない。

（怖いのか）

美咲の体がかすかに震えていたことに俺は視覚ではなく肌で感じ取
っていた。

だから。

「大丈夫、俺がついてる」

短い兄の言葉。

しかしそれゆえ、本音であることがストレートに伝わる言葉であっ
た。

それに。

「うん、分かった、お兄ちゃん」

短い妹の返事。

本音を本音で返す。

それが全く嘘偽りない言葉だということはすぐに分かることになる。

「美咲・・・行くぞ？」
言葉のままに。

「うん、お兄ちゃん・・・」
全てを受け入れ。

妹は目を開け、俺は見ないようにしていた壁を見つめた。

「俺・・・2組だ」

「わ、私は・・・ふぁ・・・2組だぁ!!」

「よし、これで一緒のクラスだっ!!」

「そうだねっ、お兄ちゃんっ!!」

兄妹二人そろってその結果に満足し、喜び合った。

（ちなみにクラスは1組から9組までである。なかなかの確立である）

しかし。

その振り分けが皆平等に行われたのであればの話である。

教室内。

教室の中は普通の高校のものといったって変わらない・・・ただ、広さだけが普通ではなかった。

2人用の席を1人で使えるレベルと考えると分かりやすい。とても、40人クラスの広さではなかった。

海斗は自分の席を探す。

この座席の順番はこのテストを受けたときの受験番号順だったはずだ。

しかし、クラスの振り分けにより、番号が飛び飛びになっているため、

おおよその場所しか分からない。

「たしか、ここらへんだったはず・・・」

海斗は廊下側のほうへ歩いていく。

「おっ、あつたあつた」

海斗は自分の席を見つけ、そこに座ろうとする。

しかし。

「あの、そこ・・・わ、私の、席・・・です」

蚊の鳴くような細かい声が後ろから聞こえた。

「えっ・・・」

振り返る。

後ろにいたのは、

目を潤ませ、今にも泣き出しそうになっている女の子だった。

その儚げな姿に海斗はすっかり見とれてしまっていた。

白い肌。

細い体。

か弱さを極めたような体つき。

その体を維持して生きていることに感動を受けてしまいそうなほど。

少女は夢げだった。

しかし。

それを凌駕するほど、

少女は美しかった。

もし、その姿を例えるなら・・・

「女神みたいだ・・・」

自然と言葉がこぼれる。

それは海斗の本心であり、嘘偽りのまったくない言葉だった。

「え つ？」

それゆえ。

目の前にいる純真無垢な女の子にはその言葉は刺激が強すぎたようだった。

「っふえええっ!？」

今まで、美しすぎるほどの白を体現させていた顔に、一瞬にして赤に染まっていた。

そして・・・

その様子を見ていた海斗はふと、気づいてしまう。

今までは少女の放つ『儚げ』な像に見とれてしまっていて、気が付かなかったが・・・

少年は見てしまった。

その少女の大きく実った二つの果実を。

「な っ!？」

驚きは一瞬。

理解してしまう。

その神聖とも思えたその体に。

世の男たちを魅了してやまない悪魔のような誘惑を。

反則だ。

海斗はその一瞬の驚きの中で思う。

そんな美しい女神のような体を持っていながら。

男を惑わす魅惑の武器をも有しているなんて。

驚きのあとは行動。

それも一瞬。

迷うことなく、その高校生では実りすぎた二つの果実に飛び込む。

ここは我慢とか。

高校生としてとか。

そんな見えない鎖を一瞬にして破壊し。

自分の欲望にのみ忠実に。

今ある真実に素直に飛び込んでいく。

それが海斗の、

本心であり。

全てであり。

彼を突き動かす『力』なのである。

「おっぱい揉ませてくださああああい！！！！」

少年は少女に飛び掛る。

周りの少年たちもその光景にほとんどが気づいていた。

そして、その一瞬後の光景を待ち焦がれていた。

だからこそ、海斗という少年はそのまま行動し続けることが出来た。

クラスの男子が味方、あるいは傍観者になっている。

そのまま、飛び込んでいいと。

無言の雰囲気を作り出している。

それは。

嫉妬であり。

期待であり。

希望であり。
後ろめたさであり。

しかし、自分たちでは成し得ないことであつた。
そう。

このとき、男子はこの少年に味方した。

男子だけは。

「うちの舞^{まい}に何してんのよバカーーっ！！！」
「ぐはっ！？」

右方向からの殺人キック。

海斗は左方向に吹き飛ばされる。
そのまま壁に叩きつけられる。

「ふんっ、女の子の胸を無理やり触ろうなんて・・・最低っ！」
本人よりも明らかにキレている少女が言う。

「お、お前の胸も、小さい、ながら・・・美乳・・・だな。」
「なっ！？」

壁にめり込みながらも蹴った相手の胸を冷静に分析する海斗。

「な っ！？」
「ななななな、何言つてんのよっ！！」
「ぐふっ！？」

再度蹴りが打ち込まれる。

そのとき海斗は見てしまった。
少女の蹴りが決まった瞬間、スカートの中からチラリと見えた白い布が。

「・・・・・・・・・・白・・・・・・・・か。」

「・・・・・・・・・・ッ!?!?!」

最初はキョトンとしていた少女だが、海斗の言ったことの意味を理解した瞬間、

顔を瞬時に真っ赤に染め上げ、第3撃を繰り出す。

「この変態っ!?!」

「ぐはぁ!?!」

その後、海斗の姿を見たものはいない・・・（笑）

隣の席の女の子（後書き）

あとがき。

なかなか先に進まない本編。

この先をどう書くのか・・・

全くもって・・・マズイッすね（笑）

とりあえず、この辺りはゆる～く行きますかね。

女教師の憂鬱

「ふう・・・緊張するなあ・・・」

1年2組の教室の前で、ある一人の新米教師が呟いた。

彼女の名前は【秋山 菜月】
あきやま なつき

『年齢はひ、秘密ですっ!!』

今日からこの名門校【魔法立アグライア高等学校】1年2組の担任を務めることになった。

学校長から、突然担任に任命されたときは驚いたが、せっかくくれたチャンスが無駄にするわけにはいかないと、引き受けたのだ。
った。

ひたむきに努力を重ねた。

ひたすらに。

どこまでも。

そのため。

「竹島たけしまの奴、毎回毎回 私の胸ばっか見て、いつか叩き潰してやるんだからっ!」

精神的に少々疲れ気味のようです。

「でも、今日からここでは1年2組の先生、皆から好かれるような先生でいなくっちゃ!」

菜月は自分を鼓舞し、教室の扉に手をかける。

『ガラガラガラッ』

教室の扉を開ける音。

一瞬、昔の学校時代を思い出した。

意味もなく大きな音を立てる扉の音。

そして扉の奥。

期待や不安、色んな感情が混じりあつた世界。

ここの世界、あちらの世界。

この扉が境界線。

どんな世界が待っているか、扉を開けてみなければ分からない。
それはとてもワクワクして、でも、とても怖くて。

それはまるで宝箱を開けるよう。

当たりやハズレがある宝箱。

私は今、その宝箱を開けようとしている。

心臓が高鳴る。

それは長らく忘れていた懐かしい感じ。

このときになって、初めて先生になってよかったと思う。

こんなドキドキを教師は毎日感じられるのか・・・。

「ふふっ・・・」

そんなことを思い、ちよつとだけ胸の中が晴れやかになる。

「さあて、いつちよ、やってやりますかっ!!」

菜月はまぶしいくらいの『光』を感じながら教室へ足を踏み入れる。

そこには。

「え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

顔を真つ赤にした少女と。

壁にめり込んだ少年がいた。

「あゝっ」

どうやら、私は『ハズレ』を引いたらしい。

「あつ、先生っ・・・・これは・・・・その・・・・。」

顔を真つ赤にした少女がしどろもどろに弁解の言葉を探している。

そこへ、壁にめり込んだ少年がその言葉にかぶせるように言う。

「せ、先生っ！ Dカップですねっ！　そして、その魅惑的みわくてきな体、最高ですっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!!??」

少年の言っていることを理解した瞬間、思わず悲鳴をあげようとしてしまった。

（な、なぜ私のバストサイズを・・・・っ!？）

そうこうしているうちに、少年は壁から抜け出し、何事もなかったかのように

そのまま菜月のほうに向かってきた。

そして。

唐突に。

「すみません、胸、揉んでもいいですか？」

爆弾発言投下。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

あまりにもぶっ飛んだ言葉を聞いたので、思考が停止してしまっていた。

それでも、少年は止まらない。

「いやあ、先生すっごく綺麗だから、揉んでみたいなーなんて」

これは冗談なのか、本気なのか。

それを確認する前に、次の刺客がや^{しかく}ってきた。

「アナタっ、先生に向かって何言ってるのよっ！！！」

「ぎゃあああああ！！！」

今度は、まるで『クラス委員長の鏡』のような少女が杖を振りかざし、少年を『叩き潰していた』。

それはこの世界でいう『魔法』と呼ばれるもの。
体内の魔力を消費して、『奇跡』を生み出すもの。

神から与えられし『力』

そのクラス委員長（決定事項です）の放った魔法は、ハンマーを形どったもので相手を叩き潰すという、
無属性の物質系魔法である。

形どった物であるため、強度や重さなどはその使用者に委ねられるが、彼女はかなりの魔法の腕を
持っていることは、その地面にめり込んでいる少年を見れば明らか

であつた。

しかし。

普通に悪行に走る生徒を止めるためだけならば、
ここまで強い制裁を加える必要はない。

ならば、なぜこんなことをしたのか。

彼女がこれほどまでの制裁を加えたことには理由があつた。

要するに。

『次、こんなことしたら、アンタたちもこの少年と同じ末路をた
どることになるわよ』

という言葉がこの魔法には隠されていたのだらうと菜月は直感的に
理解した。

しかし。

この少年も難儀なものだと思つてしまう。

周りへの威嚇のため、その犠牲となつてしまったのだ。

それでも。

その少年は少しよろめきながらも、ゆつくりと立ち上がる。

なぜ立ち上がるのか。

その目にはさつきから変わらない人をなめるような視線を携えて。
周りを見てみれば、このクラスほぼ全員の視線はその少年に釘付け
になっていた。

その少年のすることを見逃してはいけないという。

まるで、それが彼の『魔法』であるかのように。

「あれ・・・魔法？」

そこで菜月は気づく。

その少年と他の生徒の『違い』について。

他の人たちには分からない、『菜月にのみ』分かる違い。

「どうして・・・」

ちょっとした違いは疑問につながり、それは聞かずにはいられない人間の本能となり、疑問を口にする。

しかし。

それはあまりにも美しい少女の声により、打ち消されてしまう。

「お兄ちゃん。先生来たよ。席にもどろ。」

それは短い波となって、クラスにいきわたる。連ねるのではなく、連続に。

クラスは静寂に包まれる。

それはおおよそ人と表すことが畏れ多いような、

女神のような姿。

たえず
佇まい。

声であった。

「む・・・そうだな、ごめんな、美咲・・・心配かけちゃって」

その空間で唯一その『女神』を『少女』としてみていた少年が周りのものには触れることすら

畏れ多いであろう体に触れ、頭を撫でる。

非の打ち所のない顔つき。

若干幼さが残ってはいるが、それはそれで行き詰る美しさではなく、柔らかい

温かさを感じる。

全く似てない兄妹だな。

菜月は心の中でそう思った。

あのボロボロの少年。兄と、

あの女神のような少女。妹が席につくと、

他の生徒達も野次馬態勢を解き、各々の席に戻っていった。

菜月もその流れに乗って、先生としての責務をまっとうする。

しかし、妹の登場により、菜月の疑問は解決しないままだった。

あの生徒は、兄のアレを知っているのだろう。

だからこそ、あの場面で入ってきたのだろう。

つまり。

知られたらまずいことなのだろう。

特にこの『魔法学校』では。

だとしたら、本人に聞くのは良くないかもしれない……。

どうすれば……？

……学校長に聞けばいいか。

おそらくあの生徒のことを知っているだろう人物に聞くのが妥当だ。今後、あの兄妹と付き合っていくうえで、大事なことになるだろう。

なぜなら。

『この魔法学校に居ること自体が危うくなるかもしれないからだ』

女教師の憂鬱（後書き）

今回は女教師視点でのお話。

いや、やっぱり女の先生は最高だね。

次の話もこれでいこうかな？

しょうがないよね、好きなんだもの！

てな感じで、主人公が活躍するのはまだまだ先のこと。
もうちょい待っててね！

それではっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0537z/>

変態でハーレムな魔法使い！

2011年12月17日21時51分発行